論文タイトル（MS明朝，12）Title of paper (Century, Size 12)

執筆者名 Author's name
所属affiliation
メールアドレスe-mail address

1. はじめに

原稿は日本語または英語とし，できるだけWordで作成する。ボールド，イタリック等の文字飾りは，ソフト上で書式制御を施す。完成版をPDFとWordの形でGoogle Formのの JALS３号提出フォーム により提出する。

2. 投稿原稿について

投稿原稿は他の研究誌，著書，その他専門雑誌において公刊されていないものに限る。

3. 口頭発表予稿集

口頭発表の予稿集に掲載された原稿を加筆修正した原稿については，その旨を注記して投稿する。

4. 論文体裁について

論文は以下の体裁で執筆する。

4.1. 論文枚数

論文の分量は1ページ日本語34字×30行で，20ページまで（参考文献を含む）とする。（ただし，研究ノートは15ページまで，書評は10ページまで，実践報告は15ページまでとする）

4.2. ページ番号，フォント，余白

ページ番号は，下中央にアラビア数字で記す。

使用フォントは日本語はMS明朝，英数字はCentury（またはそれらに準じるフォント）とし，サイズは12ポイントで統一する。句読点はコンマ，マルを使用する。

余白は，上35mm，左右下30mmとする（ワードA4サイズのディフォルト値を採用）英文の場合も，これに準ずる。

5. 論文タイトルと著者名

タイトルページ（最初のページ）冒頭には，論文タイトル，執筆者名，所属，E-mailアドレスをそれぞれ改行して中央揃えで入れる。日本語の論文の場合，タイトルと所属の英文も付け加える。論文タイトルの後は空行を1行入れ，所属，E-mailアドレスの後も空行1行を入れ，その後に本文を続ける。

6. 文体

文体は「～だ」「～である」の常体で統一し，用字用語は，原則，「常用漢字」を用い，それ以外のもので特に読みにくいものにはルビをつける。漢字表記かひらがな表記か迷うものについては，ひらがな使用を原則とする（例：「したがって」「すなわち」「ほか」「など」「（この）ほう」「わかる」「いえる」）。

数字についてはアラビア数字使用を原則とする(例:「1つ」「2人」「3〜5通り」「6番目」「1990年代」)。漢字熟語の専門用語については漢数字使用を原則とする(例:「一人称」「二重目的語」「三項動詞」)

次の送りがなについては,「表す」「行う」「断る」で統一する。

7. セクションおよびサブセクション番号について

セクションとサブセクションにはそれぞれ番号と見出しタイトルをつける。セクション,サブセクションの前には,空行を1行入れる。

8. 本文体裁

8.1. 本文について

各段落の出だしのインデントは,全角1字分とする。

8.2. 例文ついて

例文は,各論文ごとに通し番号(アラビア数字)とし,前後に半角括弧添え,全角2字分のインデントをとる((1), (2), (3) 。。。)。1つの例番号に複数の例を掲載するときは,アルファベット小文字(ピリオド付)で区分けし,番号とアルファベットの間に半角1字分のスペースを入れる(a. b. c. …)。なお,本文と例文の間には空行を1行入れる。

8.3. 文献表示の年号について

いかなる場合でも,括弧付きで表示する(注も同様)。ページ数の表示は,年号の後にコロンと半角スペースを入れ,その後に入れる(例: Chomsky (1965: 22))。

9. 注について

脚注とし,上付きのアラビア数字を用いて,各論文で通し番号とする。なお,本文中の脚注番号は,コンマやマルなどの外に入れる(例:「であるが,[1]」「である。[2]」)。

10. 図表について

できるだけデータのデジタル化を行い,Word上に取り込む。ただし,デジタル化がむずかしい場合は,プリントした原稿にコピーを貼付する。図表には番号(図1,表2など)を各図表の上に,必要に応じてタイトルやキャプションとともに付す。

図1 ○○○のグラフ

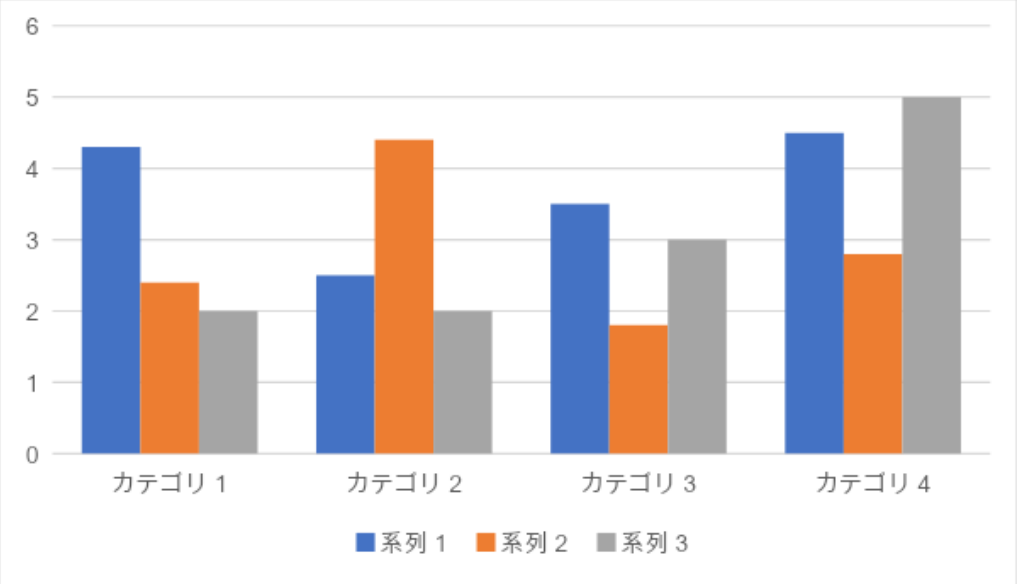

表1 ●●●

話者	正答数	正答率(%)
A	4	10
B	5	12
C	6	13

11. 謝辞

謝辞がある場合は，論文の最後、参考文献の前に配置する。

12. 参考文献について

英文書名，論文等は*English Linguistics* (=*EL*)(日本英語学会機関誌)の書式に準ずる。和文書名，論文等も*EL*の書式を日本語に当てはめた形式をとる。詳しくは同学会のウェブ・サイトおよび次例を参照。

参考文献

McCawley, James (1998) *The Syntactic Phenomena of English*, 2nd ed.，University of Chicago Press, Chicago.［洋書単著］

McClosky, James (2000) "Quantifier Floating and WH-Movement in an Irish English," *Linguistic Inquiry* 31, 57–84.［ジャーナル掲載論文］

Moltmann, Friederike (1989) "Nominal and Clausal Event Predicates," *CLS* 25, 300–314. ［学会プロシーディングス掲載論文］

中島平三 (2000)「構文文法を考える」『英語青年』第147巻12号，738–741，751； 第148号1巻，34–37；第148号2巻，116–121.［和雑誌掲載論文］

中村芳久　(2009)「認知モードの射程」『「内」と「外」の言語学』, 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明(編), 353–393, 開拓社, 東京. [和書収録論文]

Newmeyer, Frederick J. (2003a) "What Can the Field of Linguistics Tell Us about the Origins of Language?" *Language Evolution*, ed. by Morten Christiansen and Simon Kirby, 58–76, Oxford University Press, Oxford. [洋書論集収録論文]

Newmeyer, Frederick J. (2003b) "Grammar is Grammar and Usage is Usage," *Language* 79, 682–707. [同一著者が続く場合, 著者名は省略しない]

大津由紀雄・池内正幸・今西典子・水光雅則　(2002)『言語研究入門—生成文法を学ぶ人のために』研究社, 東京。[和書共著]

Perlmutter, David M. and Paul Postal (1984) "The 1-Advancement Exclusiveness Law," *Studies in Relational Grammar* 2, ed. by David M. Perlmutter and Carol Rosen, 81–125, University of Chicago Press, Chicago. [洋書論集収録共著論文]

Pesetsky, David (1982) *Paths and Categories*, Doctoral dissertation, MIT. [未公刊博士論文]